"患者優先"を貫くカナダの医療

日経メディカル編集部
蓮池修

だれでも、どこでも、安い費用で質の高い医療が享受できる態勢を目指す――。カナダがこれまで追い求めてきた医療制度は、お世辞抜きで評価できるものだ。費用の大半を税金でまかなっており、しかも医学の水準は国際的にみてもトップレベルのものが数多い。その意味でカナダの医療を指して、「世界でも優等生のひとつだ」と位置づける専門家もたくさんいる。ただ最近になって、多少暗い影がさし始めているのも事実である。その元凶は、カナダのみならず日本やアメリカ、ヨーロッパ諸国と、世界中で吹き荒れている医療費抑制の嵐だ。このため、オンタリオやブリティッシュ・コロンビアをはじめとするいくつかの州で、患者の自己負担増加の措置がとられるなどしており、カナダが理想とする公平な医療の原則が、費用の面から少し後退しているようにもみえた。昨年九月、約三週間の日程で、カナダの医療事情を主に経済的な側面から取材したが、これがその時受けた率直な印象である。しかし、実際に見て回ったカナダの医療は、依然として高い水準を維持していた。ここでは各地で訪ねた公営、私営の病院や、慢性病患者のためのナーシング・ホーム、大学医学部などの様子を見たまま、聞いたままにレポートしてみたいと思う。

カナダ最大の経済都市トロントの郊外にショーダイス病院を訪れた時、正直言って「これが病院か」とわが目を疑った。芝生をしきつめた広い庭園にはあちこちに色とりどりの花が咲き乱れ、裏手には釣りもできるという大きな池。建物の壁には野いちごがたわわに実をつけ、そのわきには患者用のミニゴルフ場までが完備されていた。

中に入るとホテルのロビーとも見まがうばかりに豪華な待合室、サンルームの奥には、患者用のビリヤード部屋が続いていた。いかにも病人が集まっていそうな日本の病院を見慣れた目には、別天地ともいえるような明るい雰囲気である。

事務長のアラン・オデール氏は、ショーダイス病院についてこう紹介した。

「当病院はヘルニア手術の専門病院であり、患者は世界中から集まってきている。また、カナダではほとんどすべての病院が州政府などの手によって運営されている公的な病院だが、ここは民間で経営されている数少ない病院のひとつだ。それだけに患者さんへのサービスも他よりはいいと思う」

いかに優れた病院かを説明するため、オデール氏はいろんなデータを示してくれた。総数八十九床の小さな病院だが、手術件数は一日平均約三十件、年間では約七千二百件にものぼる。その秘密は短い入院期間にある。大体の患者は入院の翌日手術し、四日目にはもう退院する。

こんなことができるのも、院長のショーダイス博士が開発した手術方法が優れているからだ。患者の九五パーセントは局部麻酔だけで手術を施されており、それだけにリカバリーも早いわけだ。手術直後の患者が医師や看護婦に付き添われて、歩いて病室へ帰る姿を実際に目撃したが、これにはちょっと驚いた。また術後二～三時間安静にしただけで、患者は用便に行くこともできるし、翌日にはビリヤードや散歩もできるようになるという。

ちょっと見には大胆過ぎるような方法だが、決して危険ではないとのことだ。オデール氏によると、手術後の感染症にかかるケース、他の病院では一二パーセント以上もあるのに対して、この病院では一パーセント以下と低く、さらに再発による手術が必要になる患者は〇・五パーセント未満と、よそよりも一ケタ少ない水準を誇っているという。

こうした信頼性もあって、開院以来の手術数は十四万六千件にものぼっている。しかもその患者は全世界に及んでいる。患者カードを見せてもらったが、確かに日本から手術を受けに来た人も何人か見受けられた。

いつも温かい食事

それではこうした患者サービスの行き届いた医療は、民間が経営しているショーダイス病院だからできるのだろうか。あながちそうではないようである。トロントの小児病院をはじめ、ブリティッシュ・コロンビア大学医学部付属病院、バンクーバー小児病院などいくつかの公営の病院を見て回ったが、どこでも患者に快適なサービスを提供することを第一と考える姿勢が見受けられた。もちろんショーダイス病院ほどキメ細かなものは無理としても、日本のような冷たい印象がないのは共通している。

その中のひとつにヨークセントラル病院がある。この病院はショーダイス病院